



短甲・衝角付冑



中尾地下式横穴墓群出土品



野里の田の神

ぞうがんそうたち 象嵌装大刀

1996（平成8）年に当時の吾平町教育委員会によって発掘された古墳時代（約1500年前）の大刀の鐔と鍔と柄頭の部分に銀象嵌が施されているのが判明しました。

象嵌が施された大刀は鹿児島県内で初の発見となっています。

象嵌とは、かたどってはめこむという意味で、中国から朝鮮半島を経由して日本に伝わった彫金技術です。この大刀は、鉄に銀をはめ込んであります。



068

県指定文化財 1

県指定文化財とは、文化財の中で、特に重要なものを、県が指定・選定を行って指定文化財として保護の対象にしたものです。

〇短甲・衝角付冑（1966（昭和41）年3月11日指定）
「短甲」とは短いよろい、「衝角付冑」とは戦闘帽様の古代のかぶとのことで、1950（昭和25）年6月11日鹿屋市西葭川町で古墳時代の墓（地下式横穴墓）から発見されました。古墳時代（5世紀頃）の物と推定されますが誰のものは分かっていません。

〇中尾地下式横穴墓群出土品
（2013（平成25）年4月23日指定）
鹿屋市中尾地下式横穴墓群は、6世紀後半から7世紀初頭頃の地下式横穴墓8基から構成されます。

特に6号地下式横穴墓からは、象嵌装大刀、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、耳環等、多様な副葬品が出土しました。象嵌装大刀は、鍔と鐔の両面と切羽縁金具部分に銀象嵌で心葉文や二重半円文を施したものです。

これらの出土品は、本県における古墳時代の副葬品の中でも屈指の情報量と質を誇る貴重な資料です。

〇野里の田の神（1968（昭和43）年3月29日指定）
江戸時代1751（寛延4）年に建立されたもので、



笠野原土持堀の深井戸



岡崎古墳群(15号)

石台の上に両ひざで立ち、頭にコシキをかぶり、シャモジを右手に、鈴を左手に持ち、ほほをふくらませ口をあけ、何かを語りかけているような像で、鈴持神舞型では県下でも最も古いものです。

○笠野原土持堀の深井戸
(1982(昭和57)年5月7日指定)

シラス台地の笠野原は雨が降ってもすぐ地下に吸いこまれ、長い間耕作できませんでしたが、江戸時代頃から少しずつ開発されてきました。

井戸は生活用水が不足するために掘ったもので、現存する何か所かの井戸のうち最も原形をとどめています。掘られたのは文政年間から天保年間ごろと考えられています。

井戸の深さ約64m、表面の直径は約90cm、円筒形の素掘りです。この井戸は笠野原台地の開発の苦難の歴史を物語る貴重な文化財です。

○岡崎古墳群(4号・15号)
(2014(平成26)年4月22日指定)

岡崎古墳群は、肝属平野西側の台地上に立地する古墳群で、20基の古墳からなります。15号墳は、墳丘長25.5mの帆立貝形前方後円墳で、主体部には花崗岩製の箱式石棺があり、石棺の内部から甲冑片や勾玉、管玉等が出土しました。

志布志湾沿岸の他の古墳群との関連や本県の古墳時代の様相を知るうえで欠くことのできない遺跡です。

市内の古墳時代

古墳時代は、今から約1700年前から1400年前までとされていて、古墳が造られ始めてから造られなくなるまでの時代です。

県内において前方後円墳は大隅半島にしか存在せず、鹿屋にも数基確認されています。

また、地下式横穴墓と呼ばれる南九州特有のお墓もあり、鹿児島県を代表する遺物が数多く見つかっています。



岡崎古墳群全景



堂園棒踊り



生栗須棒踊り



馬掛棒踊り



鉤引き



田打

069

県指定文化財2

ここでは県内でも多く見られる棒踊りや鉦踊りかねおどの中でも特に鹿児島県において重要でかつ後世に伝えなければならない無形民俗文化財として指定を受けたものを紹介します。

○山宮神社春祭に伴う芸能

(1962(昭和37)年10月24日指定)

鹿児島県の無形民俗文化財に指定される山宮神社の春祭に伴う芸能は、この地域の五穀豊穡を願い、400年以上続いており、「正月踊りかぎ、鉤引きたうち、田打」から成り立っています。

内容は神事のあと、堂園いくるす・生栗須まかけ・馬掛集落の棒踊りが奉納されます。歌い手は踊り子の後ろにタカビとともに、後山として付き椎木の枝をたて回しながら、「焼野のキジはおか丘の上に住む、山太郎やま太郎がに蟹は川の瀬に住む」などの歌詞に合わせて勇壮に踊ります。

鉤引きは、雌鉤めかぎの股に雄鉤おかぎの鉤枝をかけてそれぞれの氏子うじこたちが、その枝をもって歓声とともに引き合います。近年は二度勝負し引き勝った方が豊作になるといい、引き分けの際は双方が豊作になると言われています。

田打は、太郎ふん(父親)と次郎(息子)に扮する神官が模型の牛に木製のワタイモガを引かせて、ユーモラ



王子町鉦踊り

すな所作をします。ニワコト（庭常）の若芽を束ねたものともみ種を蒔き、観衆がそのもみ種を自家の田に巻き付けると豊作になるといわれています。

○王子町鉦踊り

江戸時代の後期、1753（宝暦3）年、当時の島津藩政時代は盛んに新田の開拓が行われ、王子町に築かれた和田井堰取水口から下流域約12kmにおよぶ鹿屋盆地に通水し、約150haにわたる開田を記念して生まれたもので、豊作祈念と水神祭を兼ね、毎年、旧暦8月28日に和田井堰の水神様に奉納しています。

戦前、戦後は青年団を中心に集落ぐるみで継承していましたが、青年団の衰退に伴い、1990（平成2）年4月に保存会を結成し、会員約100名で町内に長年伝わっている「鉦踊り」と「銭太鼓」を保存継承しています。王子町鉦踊りは、太鼓、鉦などを用いて「鉦踊り」とカラスが飛ぶような所作が特徴的な「からす舞」の2種類で構成されており、「鉦踊り」が先陣を作り、それを取り巻くように、円陣になって「からす舞」を踊ります。

王子町鉦踊りは、1990（平成2）年に鹿屋市無形民俗文化財、2020（令和2）年に鹿児島県指定無形民俗文化財に指定されました。

王子町鉦踊り





大賀ハス
串良総合支所の駐車場前

苫野川産カワゴロモ



画像：リナシティ情報プラザ
ホームページ
(提供者：寺田仁志)

070

市天然記念物

○大賀ハス(2011(平成23)年2月23日指定)

大賀ハスは、2000年以上昔(弥生時代)のハスの実から発芽・開花させたもので古代ハスとも呼ばれています。1951(昭和26)年、千葉県検見川地区^{けんみがわ}で3粒発掘されたハスの実は、植物学の権威である大賀一郎博士の手によって1粒の発芽、そして開花に成功しました。このことから博士の姓にちなみ、「大賀ハス」という名称に命名されたものです。大賀ハスは2000年以上自然交配されていないことが植物学的にも大変価値があります。そのため故国分重春先生(元串良中学校教諭)の指導に基づき、株分けによって串良地域で大切に育てられています。

○^{とまのがわ}苫野川産カワゴロモ

(1980(昭和55)年8月23日指定)

カワゴロモ(カワゴケソウ科の多年草)は日本では南九州だけがあり、苫野川は肝属川水系で一か所しかない自然にカワゴロモが育つ場所です。コケ類のような形の根がよく発達し、10月~12月ごろ花が咲きます。花の茎は短く横向きにねており、花は水中では閉じていますが、つぼみが空気中に出ると開きます。熱帯植物で、日の光が十分あたる所で育ちます。



イヌマキ

鹿屋市中央公園近くの熊野神社



諏訪両神社の古木

○イヌマキ(1968(昭和43)年5月27日指定)

中央公園近くにある熊野神社の境内にあります。樹齢約300年を超えた高さ約20m、根廻り約9mを超える巨大な威容を誇るイヌマキです。この木の幹は大きな空洞になっています。県下にあるイヌマキの大木の中でも特に貴重な文化財として高く評価されています。

○すわりよう諏訪両神社の古木

(1981(昭和56)年12月10日指定)

諏訪両神社の鳥居をくぐると、右側にイチョウ、左側にイヌマキの木があります。イチョウは、目通り9m、高さ19.8mあり、イヌマキは目通り3.75m、高さ22mあります。いずれも樹齢は約400年以上といわれています。イチョウは、昭和20年の台風で主幹が折れましたが、側枝が主幹化しつつあり、また脇芽も出ており、樹齢の古さを物語っています。イヌマキの幹には、鉄の鎌が打ち込まれています。これは、戦陣に臨むときに神社から受けたお守り鎌で、無事帰還したときに神木へ打ち込んだものです。





仁王像
鹿屋市輝北町市成



小型阿弥陀如来尊像
鹿屋市花岡町(花岡山浄福寺)



古銭
鹿屋市中央公民館

仁王像とは

金剛力士像のことで、口を開いた阿形と口を閉じた吽形の2像を一对として寺院の門などに安置されることが多いです。このとき仁王の名で呼ばれる。仁王像は、上半身裸形で、筋骨隆々とし、阿形は怒りの表情で、吽形は怒りを内に秘めた表情を表すものが多いです。このような造形は寺院内に仏敵が入り込むのを防ぐ守護神としての性格を表しています。

現存する仁王像で大きいものは、東大寺南大門金剛力士像が有名です。

仁王像は阿形と吽形の一对として造像するのが原則ですが、これを1体のみで表した、執金剛神とよばれる像もあります。その例としては、東大寺法華堂の本尊背後にある厨子内に安置された塑像執金剛神立像があります。

071

市指定有形文化財

○仁王像(1981(昭和56)年12月16日指定)

市成登見の丘の麓にある一对の仁王像で、昔から風邪(百日咳)を治す仁王像として親しまれ、病が治ると火吹き竹を供えました。市成が島津家支流の敷根氏の所領であったころ、菩提寺の法城山両足寺の山門に据えられた像で、今から約600年前の室町時代の作と伝えられています。「廃仏毀釈」の被害を免れるために、地中に埋めていたものを、現在の管理者の祖父吉水治左衛門が現在地に安置したものです。

○花岡町花岡山浄福寺の小型阿弥陀如来尊像(2001(平成13)年9月16日指定)

浄福寺にある手の中に収まるほどの小さな阿弥陀像です。高さ3.8cm、幅2.1cmの厨子の中にあり仏像の高さは0.9cm程です。これは花岡島津家六代久誠の妻時子が所持していたもので、夫婦ともに密かに礼拝していたといわれています。

○古銭(1962(昭和37)年11月15日指定)

1961(昭和36)年、田崎町老神で工事中に発見された中国の前漢から元寇の中国銭で、ほとんどは北宗銭であり、室町時代に埋められたものと思われます。



中郷小野原墓地の納骨宝塔
鹿屋市串良町有里



車田の田の神
鹿屋市吾平町上名

○中郷小野原墓地の納骨宝塔
(1982(昭和57)年1月22日指定)

鎌倉末期ごろと推定される肝付家主流とみられる納骨宝塔は、正面と右側に薬師如来像、左側に烏帽子水干姿の合掌人物像が浮き彫りされており、古石塔としてまったく類例をみない宝塔です。

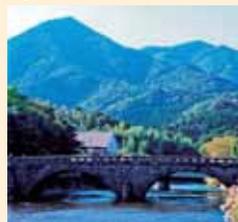
浮き彫りされている薬師如来像は、有名な鎌倉の薬師三尊の薬師像と同じく外傷の担当を意味します。三角巾を膝においた、特殊な姿勢の薬師如来像が浮き彫りされており、烏帽子水干姿の高貴な人物が薬師如来に合掌祈念する姿は、極めて暗示的です。肝付兼藤の納骨宝塔とする説が有力視されています。

○^{くるまだ}車田の田の神(1987(昭和62)年8月22日指定)

この田の神像には山水を表現したと思われるものが刻まれており、像高93.5cm、山水の高さは52cmで、渦巻き模様のシキを被り、袖の長い上衣と袴をつけています。左手はメシゲ、右手はスリコギをもち、山水の背面には磨崖仏風に小仏らしいものが浮き彫りしてあり、また頭上にも胸元にもさらに小さい仏像がつけてあります。この山水は修験道場としての山を示しており、その山から現れた効験あらたかな像を田の神としたと思われます。

祓川町の大園橋

1904(明治37)年5月に完成し、全長30m、橋の巾3.1m、高さ約5mで、大隅地方に現存する数少ない石橋です。地域の住民や市により大切に守られています。



田ノ神について

稲の生育を助け、豊穰をもたらす神の総称で、古くから水稻耕作が行われてきた我が国では、豊作を祈願し、収穫を感謝して田の神をまつてきました。

田の神像は鹿屋のいたる場所にあります。

[項目075参照]



中郷の田の神像



川原園井堰の柴掛け



大始良西方棒踊

いせき しば 川原園井堰の柴掛け

川原園井堰とは、江戸時代の初期に構築され、1902（明治35）年に改築された歴史的に価値の高い取水堰で、下流に影響がでないよう適度に水を逃がす柴を使った全国でも珍しい構造となっています。用水路は森を抜け、農家の庭先を巡りながら田畑を潤し、また、地域の防火用水にも利用されています。

この井堰は年に1度の補修（柴掛け）が必要です。

柴掛けは、近くの里山から切り出した柴を150束揃え、川幅いっぱい隙間なく並べます。一年に一度、皆で堰を再生し、水に感謝し、豊作を祈る場が、柴掛けの場です。地域社会にとってのアイデンティティの形成・確認の場であり、生かされているということを実感し共有するための場と言い換えることもできるでしょう。

このような井堰は、現在日本ではここにしか残されていません。

単純な利便性や合理性を超えたところに価値がある貴重な場所です。

072

市指定無形文化財

○大始良西方棒踊（1964（昭和39）年2月15日指定）

大始良、郷社としての岩戸神社には、数々の神事が伝わっていますが、西方の棒踊りもその一環として産土神に奉仕し、五穀豊穡、厄病退治、家内安全を祈願するために行われてきているものです。これは西方だけでなく、東方としても鎌踊、獅子目の鉦踊りというように、各集落からの出し物は一定していたのですが、東方、獅子目、横山方面のものはいつしか絶滅してしまい、今日においては西方の棒踊りだけが行われています。そのはじめは、判然としませんが大体宝暦時代ごろからと思われる資料が残っています。それに1893（明治26）年谷山からの移住者たちが虚無僧踊りを加え、今日に至っています。構成としては、虚無僧踊りと棒踊りからなっています。踊りの組み立てとしては総指揮である旗持ちが5、6人を従え、上げ唄をうたいながら踊り場に入ります。その後15人に踊り子、さらに若干名の後継者が同じく上げ唄をうたいながら続きます。これを庭入りといいます。旗持ちの「こんだ踊りじゃっど」の合図によって踊り始めます。



しか祭り



刀舞

○しか祭（1966（昭和41）年4月1日指定）

七狩長田貫神社では、2月になると古い伝統を持つ名物の弓（30cm）、矢（15cm）作りに忙しくなります。2月17日（古くは旧暦1月17日＝旧正月3日）の早朝、太鼓の初音とともに恒例の「おきんだて」の儀式が行われます。10時になると、露払いを先導に、一之王を騎馬で神官が奉持し、神職、氏子総代、狩人、付添人を従えて笛を吹きながら約4km離れた外園まで神幸します。昔は16日にも下谷（新生町）を経て上谷まで神幸したといひます。集落の人たちは、田崎の神が通るのを今か今かと待ちました。久間田の神能祭りの御旅所では、昔から野元家が豆腐の田楽を作って差し上げるしきたりになっています。女は白糸を、男は手製の足中草履をそれぞれ神様に差し上げ、神幸の帰りには、神社の弓と矢をいただきます。もらった弓矢は神棚や仏壇に上げて、1年間のお守りにするといひます。神幸は、打馬の上にある早馬馬場の神能祭りの御旅所に到着します。神官はここから神能まつりの北方、約500mも離れた一の谷まで神幸切りに行きます。そこで神榊に御霊移しの儀が行われます。これを右祠の前に立て、小枝に弓と矢をかけて祀ります。以前は、この祭りに参加すれば、今年は大獵があるといわれていたので、大勢の狩人たちが集まっていた。

かんなめ 刀舞

旧6月15日八坂神社の祇園祭に行われる神楽舞です。刀、長刀、鬼神、田の神、弓の五つの舞いを同時に舞いながら神輿と共に町内をねりまわります。元来、祇園祭とは無関係に明治末まで波之上神社の神事として大晦日の夜、明け方まで行われていました。ところが、祇園祭りが故あって山車も廃止されさびれてしまったので、その復興策としての神楽舞を祇園に随伴させ、街頭まで進出して行われるようになったのです。祭は神社で祭典をしたあと、神前で青年二人が長刀舞を行います。このあと、神社を出発して街頭に繰り出します。この間、大太鼓を打ち、大通りの要所に停止して有名な和歌を朗詠しながら5種の舞いを同時に行います。役割は太鼓2人、露払い2人、御輿かつぎ4人、和歌朗詠者2人、舞人は多数であります。服装は白浴衣に袴、白足袋は共通のほか、それぞれ鬼神面、田の神面、陣笠、白だすき、青だすき等の舞い姿です。



祓川の棒踊り

はらいかわ

祓川の棒踊り



073

各地域の棒踊り

棒踊りとは、氏神の祭りや豊年祈願に行われることが多い、棒を打ち合わせて踊る踊りです。

そろいの着物に白鉢巻、白だすきをつけて2人一組に向かい合い、時には3人一組となり棒を激しく打ち合わせて踊ります。棒は六尺棒が一般的で、三尺棒が組み合わせられることも珍しくありません。所によっては、棒の代わりになぎなた薙刀や鎌、刀、尺八などを持って踊ります。薩摩藩が郷民に武術奨励のために行かせたと伝えられますが、棒を打ち合わせることによって悪霊を鎮め、豊作を祈り、村の安泰を祈る呪術として行われたと考えられます。

※1尺は、約30cm

○祓川の棒踊り

この棒踊りの起源は、はっきりしませんが、五穀豊稔・えきびょう疫病退治を祈願して3月の日曜日に瀬戸山神社にて奉納されます。唄も踊りもテンポが早く勇壮で気性の激しい踊りです。



末次の棒踊り

○末次の棒踊り

蔵助という人が谷山から当郷下名末次集落に移住して、末次集落の人たちに棒踊りを教えて有名になりました。そして、近所にある宮比神社^{みやび}に奉納したのが始まりと伝えられています。この集落で棒踊りが初めて踊られたのは明治2・3年頃とのことです。

[項目074参照]

○持田の棒踊り

加覧喜次郎という人が、1898（明治31）年5月のころ川辺から吾平^{てらがさこ}の麓寺ヶ迫に移住して、寺ヶ迫集落で自ら三尺の木刀と六尺棒を持って時折、棒踊りを見せていました。そのころ持田集落の東桂木三太郎は、20歳ぐらいの青年でしたが、喜次郎を師匠としてその棒踊りを伝授され、それを持田集落の棒踊りとして広めました。

[項目074参照]

○上・中・下平房、柏木の棒踊り

鹿児島神宮の御田で、農民集団が田植えの際に歌ったとされる「田歌」から始まり、後に薩摩示現流などの「棒術」と一緒になって出来たものです。

持田の棒踊り



下平房の棒踊り



柏木の棒踊り





持田棒踊り



八月踊り

持田棒踊り

項目073の補足です。

この棒踊りは、真影流と銘打って、踊りの勇壮さを誇るためのものとなっており、6人一組で組数をつくり、アラソイ、ソイの掛声高く勇ましく踊るものです。

服装は、白鉢巻、浴衣、角帯、五色のたすき、手甲、けはん、わらじがけのいでたちです。

現在、持田棒踊保存会が結成され、この保存に力を注いでいます。



持田棒踊り

(第41回 美里あいら文化祭)

074

郷土の芸能

鹿屋市には、昔から続く郷土の芸能があります。時代の流れの中で少なくなってきていますが、今でも多くの方々が伝統的な芸能保存会を組織して継承されています。ここではその保存会を紹介します。

○八月踊り保存会

吾平町の八月踊りは、1758(宝暦8)年(今から約230年)以前の頃から踊られていたものとされています。旧暦8月13、14、15日は吾平の八月踊りの日でした。13日が庭ならしで、本踊りは15日、庭もどしは16日に上町の道路で踊っていたそうです。当日は、日が暮れると、「だしごろ山」に登ります。人々が三々五々として集まって来て、まもなく楽が鳴り出し、踊りが始まります。

この踊りには、歌い手(4~5人)、踊り子(老若男女約100人)の外に、三味線(2~3人)、太鼓(3人、最近では歌い手が太鼓をたたく)、拍子木(1人)、胡弓(1人)、鉦(1人)が必要です。

踊り子の服装は、浴衣が多く、烏追笠(主に女)、白足袋(女)、お面かぶり(男女)、頭巾(男女)、草履ばき、はだし(男)、袴(男)、鉢巻(主に男)、角帯、普通の帯、油へぐろを身体に塗った裸の男など、様々な装いでした。



中央麓そば切り踊り



末次棒踊り

現在、吾平町八月踊保存会が結成され、この保存に力を注いでいます。

○中央麓そば切り踊り保存会

今からおよそ120年以上前に、現在の吾平町麓地区町内会^{かこい}榊下班の中俣さんが、鹿児島市谷山から伝えたとされています。

昔、下働きをしていた娘のケサガメが、祝いの座で踊りをするように命ぜられました。踊りを知らないケサガメは、自分がいつも作っている「そば切り（そば切りの工程）」を踊りを交えて、母親と掛け合いをしながら、おもしろおかしく踊って見せました。その仕事^{くさ}草が、とてもユーモラスで皆大笑いしたそうです。それが発端となり、「そば切り踊り」が踊り継がれています。

【吾平そば切り踊り（歌詞の一部）】

ハイ つぼや とおれば しらはが みゆるや
 しらは みても よいやは～ ならぬ
 ア ソーラ 挽きかただんじゃが
 ア ソーラ 挽きかただんじゃが
 ア ソーラ 挽きかたすんだ
 挽きかたすんだ コサー ヨイサー

末次棒踊り

項目073の補足です。

この踊りは、三尺棒2人六尺棒2人の4人が一組となり、数組が一緒になって踊り、太鼓の囃子^{はやし}が必要です。

服装は、白装束^{しょうぞく}（白かすりの着物、白鉢巻、白たすき）、手甲（黒）、けはん（黒）、わら草履がきです。

平成12年度より休止中ですが、現在、末次棒踊保存会が結成され、この保存に努めています。



宮比神社での奉納



末次棒踊保存会



農民型

農業する自分たちに似た姿のものです。



衣冠束帯型

神社にいる神主さんのような姿をしたものです。

田の神像色々 市内で出会える主な形

田の神おっといについて

鹿児島弁で盗むという意味のオットイ。全ての田んぼが豊作とはならない場合があります。そこで豊作にしてくれる田の神を別の場所からオットってくるのです。オットられた田の神が行った先で豊作をもたらすと、米や野菜などたくさんのお土産をもって帰ってくるのでした。盗まれたというより出張といったところでしょうか。

まわり田の神

田んぼの側だけではなく、家々をまわる小型の田の神像。各家々で丁寧に扱われていました。



075

鹿屋の有形文化財

○田の神象

市内には142の田の神像があり、田んぼの側にあるもの、かつて家々を回ったものがあります。鹿屋市では、5種類のタイプに分類されていて、持ち物や姿に違いがあります。

左の田の神像は、鹿屋市野里町の田の神像です。鹿児島県の指定文化財になっています。

左手には鈴を持っていて、田の神舞を踊っている姿をしています。台座に作られた年号が入っていて、1751(宝暦元)年に作られたようです。素材になっている石もピンク色をしたきれいな石で、荒平石という地元産の石で出来ています。





旅僧型

旅をするお坊様の姿をしたものです。



田の神舞型

田の神舞という踊りを踊っているものです。

たくさんある田の神像の中でも、特に変わっていたり、カワイイものを紹介します。

まずは、吾平町車田の田の神。

田の神像は、神様の像だけが作られることがほとんどですが、この像は、隣に山などが表現されています。

さらに、頭の上に小さい仏像が彫られています。とても珍しいものです。



次は、串良町田中屋敷の田の神。この像は、首をかしげていて、とてもユーモラスです。他の田の神様も豊作を一緒によろこんでいるようですね。



仏像型

田の神 = 大日如来との考えたものです。鹿屋市内には多くはありません。

写真は永野田町迫の木戸の田の神です。

田の神信仰

約2000年前の弥生時代から米を作り食べてきた日本人にとって、田んぼを大切にすることは大変大きなものです。ですから、田に関係する祭りや儀式が多く伝わっています。

田の神様は春の田植えの頃に山からやってきて、収穫の終わった秋に山にもどって山の神となるという考えに基づいて大切にされてきました。